

生涯教育月報

2021

春

季刊 No.125



屋久島 屋久杉

- 評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式 2
- 第36回 彫刻奨学生作品展 6
- プロフィール・インタビュー
目黒区教育委員会 教育長 関根 義孝さん 12





例年より間隔を広く取った会場

評議員会および 研究助成金授与式、 論文入賞者表彰式

いつでも、どこでも、誰でも。生涯にわたって学びの機会を

2020年11月13日、The Okura Tokyoにて評議員会および研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。評議員会では、第47期決算および第48期予算が報告され、すべて承認された。

その後、会場を移し、例年通り研究助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。冒頭、財団を代表して城真二常務理事が以下のようにあいさつした。「当財団は1975年に設立され、以降45年間、学びを志す人々に学びの場を提供してまいりました。2010年12月には公益財団法人の認定を受け、10年が経過。今年で11期目に入り、より公益性を高めた事業を行っております。1976年から実施している研究助成金は、今年で延べ131名となりました。また1977年から実施している懸賞論文は今年で42回目となり、応募者数は延べ12,856名となりました。まさに継続は力なりを実践している事業です。」

さて、今年は本来であれば東京オリンピック・パラリンピックが開催され、世界中から多くの人が訪れ、異文化体験・国際交流が国レベルでなされるはずでしたが、残念ながら、新型コロナウイルスの影響により叶いませんでした。コロナ危



あいさつする城 真二常務理事

機が今後も続くであろうとふまえれば、私たちは未知のウイルスと共存する選択をすることになるかもしれません。こうした状況で当財団は、ウィズコロナ、アフターコロナを想定し「いつでも、どこでも、誰でも学べる」をモットーに、人間性豊かな人を育て、実りのある人生を送ることができ、自己の人格を磨くことができるように、生涯にわたっての学びの機会を提供してまいります。」

研究助成金授与式

続いて、生涯教育に関連する調査、研究を支援するための研究助成金の授与式が行われた。今回は給付した10名の内6名が出席し、二人ひとり研究題目と概要を発表した。

「ライフサイクルの全段階にわたる身体的リテラシー学習のニーズ調査研究」



宮原 資英さん
(弘前大学大学院
保健学研究科教授)

人間の体は「動き」に興味を持ちます。健康になるため、健康寿命を維持するために体を動かすことは、体力、スポーツなどの啓蒙活動全ての動きが関係します。そのリテラシーに基づき、ライフサイエンスの側面から、元気で健康に生活するための支援について研究していきます。

「がん患者に対する緩和ケアを担う薬剤師

育成のための体系的な卒後教育プログラムの開発」



内田 まよこさん
(大阪薬科大学 臨床薬学
教育研究センター講師)

2人に1人ががんになる時代といわれ、また、超高齢化社会が到来する中で多くの方が薬を飲んでいきます。その現状に着目し、患者さんと深く関わる薬剤師育成のため、2年1クールの短期で学ぶことができる卒後教育プログラムの開発を目指します。

「沖縄県の子供を対象とした社会情動的スキルの実態調査」



我那覇 ゆり子さん
(那覇市立松川小学校教諭)

沖縄県の子供たちを取り巻く社会には厳しい環境があります。その実態を把握し、成長を促すために、沖縄県の子供たちを対象に質問紙調査を行い、他県と比較しながら実態を明らかにしたいと考えています。また、成長に効果的な教育プログラムを考案していきます。

「生涯教育の場としての動物園／オーブ
ンラボ型比較認知研究による環境教育」



村松 明穂さん
(京都市立松川小学校教諭)

猿やチンパンジーを対象に、数字や記

憶を学習する動物の知性に関する実験は大学などの研究機関で行われますが、最近ではオープンラボ型として動物園で行う例が増えてきています。動物園の役割である環境教育に対して、新しい知見・手法を提供できると考えています。

「震災デジタルアーカイブを活用した地域防災コミュニティモデルの構築」



廣内 大助さん
(信州大学 教育学部 教授)

長野県神城断層地震をきっかけに、災害の記録を残すために写真・動画インタビューをインターネット上で公開する取り組みを2017年から始めました。そのアーカイブを生涯学習のチャンネルとして活用し、学校教育などのプログラムでも確立させていきたいと思っています。

「Web研修の効果検証」対人援助職(保育者)に対する遠隔研修は受講者の心にどう響くのか」



副島 里美さん
(静岡県立大学 短期大学部 准教授)

今年にはコロナ禍によってWeb研修の機会が増えました。まだWebの浸透が十分でないと感じる部分もあり、今後、浸透を図るとともに、対面との違いや、より満足感を高め成長を促進できる研修方法を研究していきます。

論文入賞者表彰式

最後に、第42回懸賞論文入賞者の表彰式が行われた。今回のテーマは『すぐそばにある「世界」』。全国から463編が集まり、19編が入選した。表彰式に出席した入賞者8名に、城常務理事から表彰状と賞金が授与された。



論文入賞者の皆さん
後列左から鴨野 珠里さん、田平 美来さん、間 秋君さん、平佐 日奈子さん、大森 響子さん
前列左から表野 いつみさん、堀山 有里子さん、森山 卓郎論文審査委員、城 真二常務理事、吉野 恵玲奈さん

第1席「静かなる世界」心を一つに抱く未来 国境を越えて〜願いは一つ〜
堀山 有里子さん
(北海道・主婦)

25年前に出会った遠い国の親友。来日して再会を果たすはずでしたが、叶いませんでした。医療従事者である彼女が守ったこの世界で、笑顔で会える日を心待ちにしています。

第2席「魔法使いの弟子」
表野 いつみさん
(東京都・ピアノリスト、作曲家)

自閉症の息子は幼い頃、外国人の音楽家と出会ひ、心を通わせました。大人になり、東京オリ

ンピック・パラリンピックのボランティアに応募するまでに成長しました。息子と一緒に人の役に立てることをうれしく思います。

第2席「イツツ・ア・スモールワールド」
吉野 恵玲奈さん
(東京都・高校生)

カンボジアでのボランティアで、普通に学校に通える環境が当たり前ではないこと、自分が見てきた世界の狭さを思い知りました。これから、世界のさまざまな現実を伝えていきたいです。

第3席「守られるべき今と未来」
鴨野 珠里さん
(東京都・大学生)

タンザニアで出会ったのは、耳が聞こえないお母さんとその子どもたち。それでも毎日笑顔が絶えない家族でした。私が守りたいと思ったものは、すでに守られていたことに気づきました。

第3席「同じ空の下に引かれた線」
田平 美来さん
(東京都・大学生)

中国で素敵な人に出会ったからこそ、今回のコロナ禍で国だけを見て線を引きするのは違うと感じ、悲しくなりました。多様性を認め合える社会になってほしいと願っています。

第3席「私が見た世界」
大森 響子さん
(神奈川県・高校生)

かつて4年間住んでいたアメリカを再訪。移民やホームレスの方々とのボランティアで世界に対する価値観が一変しました。10代で新たな可能性を見つけられた経験は大きいです。

第3席「偶然に身を委ねる私」
間 秋君さん
(宮城県・大学生)

中国から日本に留学して5年、新型コロナウイルスの影響で、自国に帰らず日本に残る選択をしました。1人で不安な中、数々の偶然の出会ひが私を安心させてくれました。

第3席「差し伸べられた手の先に」
平佐 日奈子さん
(東京都・会社員、大学院生)

北京の大学に留学中、孤独で寂しい思いをしていました。そんな中で思いやりを差し伸べてくれた友人たち。今はそれぞれが自国に帰ってしまいましたが、いつかまた再会したいです。

音楽奨学生演奏

恒例の音楽奨学生の演奏が披露された。広い会場に響き渡る演奏に、みんなが引き込まれた。



素晴らしい音色を響かせた長谷部 りさん



力強い演奏を披露した大竹 かな子さん



歌声で皆を魅了した市野 梨沙さん

世界が一変した 2020年



早稲田大学文学学術院 教授
森山 卓郎

受賞者の皆さん、この度は本当に
めでとうございます。応募数463編
の中からこうして入賞されたこと、本
当に素晴らしいことだと思います。

2020年のテーマは『すぐそば
にある「世界」』でしたけれども、テー
マが決まったときは、まさかこんな年
になるとは想像していませんでした。
2019年はラグビーワールドカッ

プが日本で開催され、大変な盛り上
がりを見せました。そしていよいよ
2020年夏、東京オリンピック・パラ
リンピック開催により多くの外国人が
日本を訪れるはずでした。駅内表示は
英語、韓国語、中国語が併記され、車内
のアナウンスも日本語から多国語に変
わり、本当に希望に溢れていたと思
います。

しかし、新型コロナウイルスの蔓延
が世界中を震撼させ、世界を大きく変
化させました。まさに国と国がつなが
るグローバルイズム、グローバル社会で
あるからこそ、このように世界中が一
変してしまうのかと、その脅威を身を
もって体験しました。感染の拡大は、凶
らずも私たちの命、組織の存続や雇用
を危機にさらし、仕事や暮らしといっ
た日常は変化を余儀なくされていま
す。そして、人々の意識や価値観にも影
響を及ぼしました。

そのような中、今回は新型コロナウ
イルスに関連する作品をたくさんいた
だき、改めて「身近な世界」を感じさせ
ていただきました。

日本で感じる「世界」

まずは第1席を受賞された、堀山
さんのお話にありました、「Listen to
[Silence]」というフレーズは、コロナ禍で
の、心の中に秘めた気持ち伝わって
くる言葉でした。医療に従事されるご
友人と再会できる日を楽しみになさっ
ているのではないかと思います。

中国からの留学生である園さんは日
本に残る決心をされたということで大
変な決断だったかと思いますが、この経
験を日本で書いてくださってこのよう
に入賞されたこと、まさに「すぐそば
にある世界」ということを感じさせま
す。中国とのつながりというと田平さ
んの作品も、コロナ禍で同じ空の下に
引かれた線ということで書かれていま
す。自分がうまくいってないとき、留
学生の方との交流で力づけられていた
という経験ですね。つらい状況下での
出会いは人に力を与えるものだと思
いました。

国内での交流もたくさん書いていた
だきました。大村さんは食べ物を通じ
た国際交流のお話、花田さんは日本で
働く外国人との交流を拓いていかれた

というお話でした。あるいは、浅野さんの『隣のセカイと仲良くなる方法 ケース① マインとおばかな私の場合』や、濱中さんの『抱擁の価値』では外国人専門のメイドを勤めた経験ですとか、ゲストハウスで多くの外国人を出迎える森山さんなど、非常に多くの方が海外の方との国内での関わりを書いています。良かったです。

表野さんの息子さんのボランテニアのお話では、小さな種がやがて花開くように、ちょっとした出会いが大きな存在になるということを学ばせていただきました。『魔法使いの弟子』というおしゃれたタイトルも印象に残りました。示唆に富む内容に加えて、文章としての楽しさもありましたね。どの文章も、描写が具体的でした。

世界へー悩み、葛藤して 一步を踏み出す

私が今回強く印象に残ったのは、多くの若い方が海外でボランテニア活動をしているということです。2席の吉野さん、佳作の古泉さんはカンボジア

でのボランテニアについて書かれていました。また、3席の鴨野さんはタンザニア、同じくホームレス移民の方に対してのボランテニア活動に従事した3席の大森さんはアメリカ、栗田さんはフィリピンのスラム街と、本当に皆さんいろんな場所に行かれています。過酷な環境で生きている方との出会いには心に焼き付くものがありました。

国際的なボランテニア活動は、私の子供の頃には想像できないことでした。ボランテニアという言葉は、善意や笑顔を想像してしまうのですが、実際にはさまざまな状況下で背景を持って暮らしている方々を、皆さんの作品から目の当たりにしました。

世界の貧困、差別、病気など、さまざまな厳しい現実がありますが、模範的な回答があるわけでもなく、自分の考え方や立ち位置を厳しく捉え、その中で悩み、葛藤しながら、なにがしの一步を踏み出すということ、それが世界につながっていくんだと、審査をしていて感じた次第です。

この本の表紙ですが、太陽の光は夜明けの朝日か夕日か、皆さんの目にはどう写りますか？ 私は、最初は夕日だ

と思いましたが、このような状況での出会いや世界に羽ばたく皆さんのお姿を拝見し、希望を照らす朝日ではないかと推察しました。

世界が変わっても、 人や想いは変わらない

今回は掲載に至らなかった作品もありますが、世界のありように着目して書いていただいている作品がたくさんありました。その中で掲載させていただいたものは、「人の姿」、「想い」というところが特にしっかりと描かれているように感じられました。このような状況だからこそ、国籍や人種を問わず、人と人とのつながりのありがたさというものを、改めて噛み締めるきっかけになったのではないのでしょうか。

2020年の応募では、10代が42人、20代が58人と、若い皆さんから多くの応募をいただきました。本当に素晴らしいことです。日本の未来を考えたとき、若い人たちが活躍している、いろいろな場所で頑張っていると、深く感銘を受けました。受賞者の皆さんが、女性

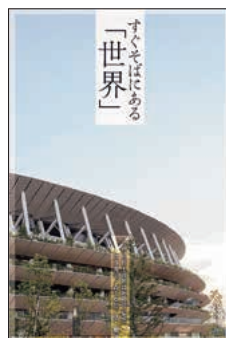
だったことも珍しいことです。偶然のことですが、ジェンダーを越えて世界を考えていきたいものです。コロナ禍での状況ではありましたが、無事に授賞式を開催していただきましたこと、関係者の皆さま、ありがとうございました。そして、受賞者の皆さんに改めてお祝いを申し上げたいと思います。本当におめでとうございます。

〈私の生涯教育実践シリーズ '20〉

『すぐそばにある「世界」』

1,000円
ぎょうせい刊

ご希望の方は財団事務局までどうぞ。



日本大学芸術学部
美術学科

KIM JEONG WOOさん



「mountain #2」



この山の中心はどこ？



鉄板を切って溶接して制作

人の感覚に入りきらないものを作品にしています。人のスケールに合わせているものはサイズを共有できますが、山は自分が感じるサイズと人が感じるサイズが違う。大きいと感じる人もいればそう感じない人もいます。山は近くに行くときに逆に大きさがわからなくなるし、中心と想ったところが実は中心ではなかったりする。それを表現しました。山は昔から信仰の象徴であり、神様が宿していると考えられているなど、人が理性でコントロールできないスケールだと思っています。この作品は鉄板を切って溶接してつなげて造っています。造っているうちに考えていたものと形が変わっていることもあります。

日本大学芸術学部
造形芸術専攻

佐藤 澄霞さん



「keep changing」



ガスマスクを
いくつも
積み重ねた作品



「untitled」
変化する姿も
面白い



「Be your self」
キラキラとまるで
鍾乳洞のよう

戦争の画像を見たときに全員が同じガスマスクをしていることに、ゾワとした感覚があり興味を持ったのですが、最近コロナで街中がマスクをしているのを見て、当時の感覚とリンクして今、作品にしたいと思いました。口は温度や環境などの状況によって形を変えていく素材なので、今の状況にも順応して前進していければいいなと思います。マスクは敵やウイルスから身を守るもの、個性を隠すもので弱さの象徴でもあり強さの象徴でもあると考えています。溶けていくことによって自分の弱み・強みといった内面を表現しています。破壊と再生を繰り返し新たな作品に生まれ変わる。思い通りにならないその溶けていく現象も面白いと感じて作品にしています。

第36回 彫刻奨学生作品展

2020年12月1日～11日まで、日本大学芸術学部江古田キャンパス内で「第36回 彫刻奨学生作品展」が開催されました。奨学生5名の作品がギャラリーや資料館に展示され、多くの人々の目を楽しませました。奨学生の作品は、3月に山梨県笛吹市「藤袋の滝大窪いやしの杜公園」内に設置されます。公園内にはこれまでの作品が81体も設置されており、大変見応えがあります。ぜひ足を延ばしてお立ち寄りください。また、3月下旬には同公園内で「境川ミズバシヨウ春まつり」が開催されますので、春の訪れを感じてみてはいかがでしょうか。

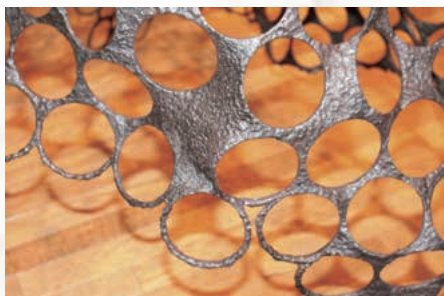
多摩美術大学美術学部大学院
彫刻専攻
渡部 紗千さん



『なにか。』
小さな丸から植物が出てくる!?



『でもさ。』



影を意識して制作

作品を造るときに「何」を造りたいという明確なものではなく「何かに見える」のではなく「どうにも捉えられる」作品を造っています。『でもさ。』の流れているようで自立している感じは、自分がそなりたいという思いを表現しています。鉄が油で黒くなるので、影を意識して丸の集合体を造りました。『なにか。』は人の廃材を組み合わせて溶接した作品で、大きなものに何かが寄生するイメージです。形のいびつさが、見る側によって受ける印象が違うので感想が楽しみです。屋外に展示して草木が成長し丸の中から出てくるなど、そのときにしか見られない表情が出ればいいと思います。

女子美術大学美術学科
立体芸術研究領域
増井 萌さん



『plane & flavor』(左) 『リラのtratakata』(右)



『バンダーガール』
人と自動販売機を融合



台座から1本の木で制作



同じポーズで…



『あぐらりぼん』

人体とももの装置を融合させた作品を木彫で制作しています。自動販売機はロボットの存在で、人手を介さず商品を購入できる便利なものです。しかしAIや技術が進歩して生身の人間が尊重されない世の中になっていることを哀しいと感じています。その悲哀を残したく作品で表現しています。人間も一枚の皮膚でできていることから「一木造り(いちぼくづくり)」という製法にこだわっています。1本の木をチェーンソーで削って刻んで形づくっています。モチーフとの相性で女性の作品になることが多く色を付けていますが、皮膚は木の色をそのまま活かしています。頭の帽子はペットボトルのキャップになっています。

日本大学芸術学部
彫刻学科
SUN HAO JUNさん



右手でつり革を握ります



『自然電車中の乗客』



『手』
SUNさん
自身の手



『首像』
生きている感じを
意識して制作

人体が好きなので人間に関する作品をさまざまな材質で制作しています。またモデルとなる人の「生きている感じ」を意識して造っています。「自然電車中の乗客」という作品は大理石を使って2カ月くらいかけて制作しました。展示する「大窪いやしの杜公園」全体を電車として捉らえて、その電車に乗る乗客がつり革をつかんでいるイメージです。妖精のような、童話の世界のような感じになればいいなと思いました。遊びに来る子どもたちを意識して可愛い作品にしました。体は丸く顔や頭は四角くしてそのコントラストを強くしました。世界中を童話の世界にしたいです。

外国人奨学生奨学金授与式



当財団では、成績優秀であるにもかかわらず、残念ながら経済的に恵まれていない学生に、学習の機会を与え、日本との友好関係を築く礎になれば、との思いから外国人奨学生制度を行っています。1999年中国天津の南開大学から始まったこの制度は、現在では中国、ベトナム、インドネシア、フィリピンに展開しています。

2020年は世界的規模で新型コロナウイルスの感染が拡大し、各学校の奨学金授与式が延期や縮小を余儀なくされました。そんな中、9月に行われたベトナム・ズンサ高校の授与式ではVNS(ベトナムスタンレー)の菊地Mgr.が奨学生一人ひとりに証書を手渡しました。10月に行われた国立農業大学の授与式では、奨学生に証書を手渡し、関係者か

ら温かい拍手が送られました。フンイエン財務経営管理大学の授与式では、華やかな会場でVNSの古仲社長あいさつの後、奨学生に証書を授与しました。また、11月に行われたインドネシアPOLINES大学の授与式には、ISE(インドネシアスタンレー)の松井社長が出席し、奨学生一人ひとりに証書を手渡しました。GSE(広州スタンレー)で開催された広東工業大学の授与式では、富永総経理や譚先生のあいさつの後、奨学生代表が喜びと今後の抱負を語りました。またその後、工場見学を行いました。

財団では、これからも多くの学生に学習の機会を与えるため、奨学助成を続けていきます。

ズンサ高校 (ベトナム)



奨学生と関係者のみなさん

国立農業大学 (ベトナム)



証書を手渡され、うれしそうな奨学生

フンイエン財務経営管理大学 (ベトナム)



生花で華やかに飾られた会場

広東工業大学 (中国)



一瞬だけマスクを外して
記念撮影

POLINES大学 (インドネシア)



奨学生一人ひとりに証書を授与



全員で「指ハート」ポーズ



奨学生代表のスピーチ

ミンダナオ子ども図書館 (MCL) へ支援物資を送付

毎年恒例となっている、フィリピン「ミンダナオ子ども図書館 (MCL)」への支援物資の寄付も、昨年9月で10年目となりました。コロナ禍のおり、どれほどの物資が集まるのか心配しましたが、みなさまからの善意のおかげで、衣料品やぬいぐるみ、タオル、シーツ、リュックサック、運動靴など、今年も多く物資が集まりました。子どもたちに素敵なクリスマスプレゼントを届けることができました。



みなさまの善意が詰まった贈り物



笑顔あふれる子どもたち

ミンダナオ子ども図書館 (MCL) に保育所寄贈

北野財団では、「ミンダナオ子ども図書館 (MCL)」が行っている保育所建設の費用を助成しています。

2020年はバランガイ・ノア保育所の建設を行いました。昨年のフィリピン・ミンダナオ島は雨が多く、MCL周辺で大規模な水害が発生したこともあり、予定通り工事が進

みませんでした。やっと完成となりました。この新しい保育所でも、子どもたちのかわいい笑顔があふれることでしょう。財団は今後も新たな保育所建設や修繕費の助成を通して、子どもたちに学ぶ機会を与える活動を行っていきます。



建設中のバランガイ・ノア保育所



カラフルに塗装されて完成

子どものためのワークショップ2020への協賛

当財団では、公益財団法人 目黒区芸術文化振興財団が行っている、子どものためのワークショップ (パレットプログラム) に協賛しています。例年は「演劇入門ワークショップ」「ダンスワークショップ」「演劇&ダンスワークショップ」など、演劇やダンス未経験の子どもたちが、実際に振付家や演出家の指導を受けながら学び、仲間たちとの絆を深めながら「めぐろパーシモン小ホール」での発表会に挑みます。

しかし2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響から、初の「オンライン演劇ワークショップ」となりました。劇作家・演出家の大池 容子さんを講師に迎え、オンライン会議システムを使い、子どもたちは画面を通して演劇の楽しさ・面白さ・難しさを学びました。オンラインという初の試みでしたが、ワークショップの新たな可能性を実感する3日間となりました。子どもたちにとっても充実した時間となったことでしょう。



配信を行う様子 (手前が大池さん)



自宅で講義を受ける子どもたち

50代から考える ライフプラン講座を開催



2021.2.13(土)

「50代から考えるライフプラン」講座を株式会社セミナー研究所の豊澤 敏明氏と緒方 逸郎氏を講師に迎え開催いたしました。感染症の緊急事態宣言延長で急遽オンライン開催となりましたが、9名の方にご参加いただきました。

働きざかりを
いきいきと



画面越しに解説をする豊澤・緒方講師

人生100年時代、仕事の期間を延ばす必要があります。しかし、今の仕事を続けるのは難しく、キャリアを変えたいことが求められ、そこには学び直しや仕事をつかみにいく努力も必要です。「何をしたいか」「何ができるか」「何にこだわるか」を物差しに考えることが鍵となります。

引退後の心配事は「お金」と「健康」ですが、「いきがい」を持つことが大切です。「仕事」や「地域」といった社会的な生活、「余暇」や「家族」の個人的生活などの充実度が「いきがい」となります。そのバランスをどう取るかであり、その土台となるのが「お金」と「健康」なのです。心配事といきがいは表裏一体といえます。その他、年金制度、税金についての解説がありました。

ありたい姿を描いて
プランを作成



プラン作成をリモートで解説

長期家計プランを収入、支出と貯蓄について20年分作成します。ライフプランを現状・ありたい姿・実現のための具体策を、仕事、地域、余暇と家族の4つの切り口で作成します。次に実現のための具体策が必要となるお金を「いくら使えるか」という視点で家計プランに反映します。ありたい姿をどこまで取り入れるかで、仕事をいつまでするかの手掛かりとなります。また、定期的プランを見直します。

ありたい姿を描き具体化する、人のネットワークを生かす、ライフワークを見つけ誰かの役に立つこと、そして今から行動するとまとめられました。受講された方からは、新たな視点を得た、具体的に考える良い機会となったなどの声が寄せられました。

ご報告



目黒区より

「図書寄贈」への感謝状受領

当財団が行っている小・中学校への図書寄贈に対して、1月20日、目黒区から感謝状を授与されました。緊急事態宣言が出されたことから、教育委員会ではなく財団ホールでの授与となりました。当財団では2010年から毎年、目黒区内の小・中学生の心の糧になるように、合計8,435冊の図書を寄贈しています。これからも子どもの学びのきっかけになるよう図書寄贈を続けてまいります。



濱下学校運営課長(左)から感謝状を授与される城 真二常務理事

アウトリーチ プログラムへの協賛

当財団では、公益財団法人目黒区芸術文化振興財団が主催している「アウトリーチプログラム」に協賛しています。この事業は、目黒区内の小中学校にプロのアーティスト

財団ニュース

(声楽家、ピアニスト)を派遣し、生の演奏を観て・聴いて、感じて、芸術文化に触れて一緒に楽しむことを目的としています。より近くで音の響きを感じてもらうため、通常は音楽室で行うことが多いのですが、コロナ禍のおり、感染対策をしっかりと施したうえで体育館での開催となりました。素晴らしい演奏を聴いた子どもたちは、明るい笑顔があふれ、心を躍らせていました。



感情を込めて歌いあげる演奏家

お知らせ



第43回

事実に基づく小論文・エッセー募集

コロナ禍から学ぶ

2020年は「新型コロナウイルス」という未知の脅威に振り回された1年となりました。年が替わっても収まる気配が感じられませんが、海外では都市封鎖がなされ、日本でも緊急事態宣言が出される

など、当たり前前の日常が奪われ
ました。

しかしコロナ禍の中、医療従事者をはじめ、社会を支えるエッセンシャルワーカーの存在がいかに重要かという事実が浮かび上がりました。また、これまで必要性が指摘されながらも達成できなかったテレワークなどのデジタル化が急速に進んだことは前進といえるでしょう。一方、デジタル環境の格差がむき出しになり、新たな問題を突きつけられるといった側面もありました。

そんなコロナ禍の中で、おうち時間が増えたことにより、趣味を見つめたり、学び直したり、新たな自分を発見できた方も多いのではないのでしょうか。

コロナ禍がいつまで続くのか誰にもわかりません。さらに様々な自然災害の傷が癒えない方々も大勢いらっしゃると思います。今年も東日本大震災から10年ですが、10年経ってもまだ自宅に戻れない帰宅困難地域の方々、ふるさとの暮らしを失った方々もいらっしゃると思います。コロナ禍に限らず、様々な災害からそれぞれに一步を踏み出す努力は続いているのです。

大変な状況であってもそこから学べることを、だからこそ学べたことはきっとあるはず。コロナ禍から学び得たこと、考えたこと、大切なことなど、ご自身の経験を綴ってください。

応募規定 縦書き400字詰め
原稿用紙8枚(10枚)

締切 2021年5月7日(金)

賞金

1席(1編) 賞状・副賞50万円
2席(3編) 賞状・副賞20万円
3席(5編) 賞状・副賞5万円
佳作(10編) 賞状・副賞3万円

入賞発表 2021年8月初旬

表彰式 2021年11月12日(金)

会場 The OkuraTokyo
(ホテルオークラ東京)

奨学生募集

学習意欲のある社会人を応援

奨学対象

・科目等履修生(学生を除く)
・放送大学大学院修士全科生および選科履修生(ただし30歳以上または実務経験5年以上)

申込者の中から書類選考のうえ奨学生を決定します。なお奨学金は給付で返済不要です。

締切 2021年5月7日(金)

〈科目等履修奨学生〉

奨学金 年間20万円
定員 15名程度

〈放送大学大学院修士全科奨学生〉

奨学金 30万円(各年度15万円)
定員 10名程度

〈放送大学大学院選科履修奨学生〉

奨学金 年間7万円
定員 15名程度

表紙ギャラリー

当財団は、『出会いにはドラマ、感動する心を大切に』というスローガンのもと、出会いを大切に、様々な学ぶ機会を提供してきました。人との出会いだけではなく、城や神社仏閣などの歴史的建造物や長い歴史に育まれた美しい原風景との出会いからも学ぶことは多いのではないかと考え、『世界遺産』を財団機関誌でご紹介します。

屋久島屋久杉(鹿児島県)

屋久杉は、世界自然遺産登録された屋久島に自生する千年以上の「スギ」を言います。なかでも縄文杉、紀元杉と呼ばれるものは、二千年を超える巨木です。その神々しさは、そこにあり続けることで増しているのではないかと思います。長い年月の間、人類が幾多もの災いや疫病などの困難を乗り越えてきたのを見届けて来たように、この度のコロナ禍で一変してしまった世の中が、また立ち直る姿を見守ってくれています。この号が発刊されるころには、日常が少しでも戻っていることを願う気持ちを込めて、神々しい屋久杉を表紙にしました。

屋久島は、1993年12月に白神山地とともに日本初の世界自然遺産として登録されました。屋久杉やガジュマルをはじめ亜熱帯植物、温帯、亜高山帯に及ぶ植生、多くの固有植物や北限・南限が自生している極めてまれな森林生態系や絶滅危惧種の動物が生息していることが登録された理由です。

屋久島には、九州最高峰の日本百名山である宮之浦岳(1936m)があり、登山家にとっても、一度は訪れたい場所です。屋久杉だけではなく、湿原や海を見下ろす360度の展望など、見どころ満載の山です。冬には頂上近くで冠雪もあり

ますし、雨がとても多いところなので、山行は慎重にする必要がありそうです。もちろん、本格登山だけではなく、屋久杉を巡るトレッキングツアーであったり、ウミガメ観察であったり、カヌー、ダイビング体験など様々なアクティビティから温泉まで楽しめます。

これらの自然を守るために様々な努力がなされ、エコツーリズムが推進*されています。ガイドの登録や認定、ツアープログラムの開発、特定地域における保全・ルールづくりなどが行われています。世界遺産をただ守るだけではなく、触れて楽しむなど活用をしていながら、次の世代へと引き継いでいくという活動です。地元や関わる方々の草の根運動が世界遺産を支えていると言えます。世界遺産を訪れた際、そんな見方をするのも良いかも知れません。



※文章引用：屋久島エコツーリズムガイドブック

訃報



当財団 専務理事
北野 隆典 儀

2021年1月26日享年64
にて永眠いたしました。
ここに生前のご厚誼に深
謝し、謹んでお知らせ申
あげます。

1978年6月に当財団理事に就任し、長きに渡り財団を支えていただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第125号

2021年3月10日発行

編集人 城 真二

発行人 北野 重子

発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会

〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号

電話 東京 03(3711)1111



目黒区教育委員会
教育長

関根 義孝さん
YOSHITAKA SEKINE

学び続ける姿勢が 地域社会の財産になる

「昨年10月に目黒区教育委員会の教育長に就任された関根さん。教育委員会の事務局で長く務められたご経験から、生涯学習・教育の大切さを強く感じているとお話になりました。」

「生涯教育についてのお考えを教えてください。」

私は一昨年10月に目黒区教育長に就任しました。その際のあいさつで「言うまでもなく、教育とは学校教育にとどまるのではなく、人生百年時代の生涯教育に」

「このコロナ禍において、学校がさまざまな重要な役割を担っていることと、その学校を地域の方々が支えてくださっていることを改めて認識しました。そして、地域の方々が学校を支えてくださるの



湘南散歩でパチリ!

は、日常的な学びに裏付けられた意識の高さによるものだと思います。それがなければ、この状況下における学校の対応

については地域社会の財産につながるのだというところで、生涯教育の大切さを実感しているところでは

「教育において大切にしているお考えをお聞かせください。」

「教育長として、各校(園)長に伝えたいのが、「子どもたちを現場に連れていき、本物にふれる機会をつくってほしい」ということです。例えば野球を観戦するにしても、テレビで観ると球場に行くのでは全く違いますよね。球場で見ると、選手たちのキャッチボール一つとってみても、無駄のないフォームや糸を引くようなボールの軌跡、心地よい捕球音など、映像からは伝わってこないものがたくさんあります。オーケストラも演劇も同じでしょう。現場で本物を見るからこそその感動があります。子どもたちには、その感動を得られる機会をできるだけつくってあげたいですね。」

「新型コロナウイルスの影響でオンラインの有用性が強調され、私の思いとは逆の方向に行っているように見えるかもしれません。しかし、オンライン環境が整った先には、現場に行くことの大切さがより重要視されるときが来るのではないかと思います。」



「北野財団の活動に対する感想を教えてください。」

「区民の生涯教育の充実に向けて長年にわたり取り組んでくださっていることに感謝申し上げます。さまざまな活動をされていますが、まず思い浮かぶのが平成22年度から続く区立小・中学校への図書740冊を寄贈していただきました。学校によつては「北野財団寄贈図書コーナー」を設けているところもあるようです。児童・生徒たちは、今はそれほど意識していないかもしれませんが、「そういえば北野財団」というところに寄贈してもらった本を読んだな」と思い起こすことが将来あるかもしれないですね。自分が多くの人に支えられていることを実感する機会にもなると思います。」

「また、日本生産性本部が主催する洋上研修『生産性の船』に、目黒区役所の若手の課長級職員が毎年度参加しており、その費用の助成をいただいています。参加者の意識を高め、見聞を広める貴重な機会に なっています。ちなみに、私は参加の機会を得られませんでした(笑)。」

「ご自身のモットーを教えてください。」

「とってかけがえのない存在となるよう努めることです。同時に、その組織を自分がいつ抜けても良いようにしていなければならぬと思っています。このどちらが欠けても組織人としては合格点を得られないでしょう。」

「趣味は何ですか。」

「今日一番難しい質問ですね(笑)。自分は無趣味な人間に分類されるのですが、あえて言うならば平凡ではありますが、書と映画、それと湘南散歩ですね。仕事に区切りがつくとすぐに掛けて、湘南の住人のようにまちを歩く習慣が学生時代から続いています。」

「また、リフレッシュ方法を職場で働く中で見つけることも大事です。働いているといろいろな出来事があり、さまざまな出会いがありますから、それを楽しむぐらいの気持ちを持ち続けたいですね。」

「読者へのメッセージをお願いします。」

「このコロナ禍では、ともすると私たちはマイナス思考に陥りがちですが、この状況下だからこそ得られた新たな気づきも少なくないはず。そして、そういった気づきはそれまで学んだことの蓄積、学び続けようとする意欲が導いてくれるものだと思います。教育長として、区民の皆さんの生涯教育のさらなる充実のために、これからも北野財団さんの力をお借りしながら取り組んでいきたいと思っています。」

「生涯学習に対する北野財団さんの活動は先進的で、時代がようやく追いついてきた」とお話になる関根さん。これからも当財団へのご指導をよろしくお願いいたします。」